

| | |
|-------------|---|
| 開催地名：京都府八幡市 | |
| 開催日時 | 令和2年1月19日（日） 14：45 ～ 16：00 |
| 開催場所 | 八幡市立生涯学習センター ふれあいホール |
| 語り部 | 横山 幸雄 （岩手県釜石市） |
| 参加者 | 八幡市防災講演会参加者 約 180名 |
| 開催経緯 | 自治会合同で、小学校への避難訓練及び体育館での避難所開設訓練が実施されるなど、地域の取組は活発だが、参加者が固定しており、かつ、多くが高齢者のため、防災意識が広がっていかない。また、東日本大震災級の災害の経験がないため、自助・共助のための取組のイメージがわからない。語り部のお話を伺うことで、防災活動に対する意識の向上をはかりたい。 |
| 内容 | <p>（1）はじめに</p> <p>岩手県釜石市は国内屈指の製鉄所を持つ“鉄の町”である。同市では、釜石湾にギネスブックにも登録された、海面下63メートルから積み上げた岩石のマウンドに、7階から8階建のビルに相当するコンクリートブロックを載せた世界最深の湾口防波堤を備えていたが、東日本大震災の津波はその防波堤を越えた。死者・行方不明者1,000名を越す犠牲者が出た。</p> <p>（2）津波に流される</p> <p>東日本大震災が起きたとき、私は海に近い老人クラブの事務所にいた。3分間ほど長い揺れが続いた。建物を出ると消防の人が防波堤の扉を閉めようとしていた。それを手伝ってから車で家に向かった。隣家の寝たきりの知人を訪ね、その家を出ると、津波が川の堤防を越えて迫ってきた。自宅に逃げ込んだとたん、玄関のガラス戸が割れた。水がどっと入ってきて足をすくわれた。気付くと私の上をごみが流れている。「水の中にいる」と思い、水面に顔を出して息をした。立ち泳ぎをしたが、足を伸ばして泳ぐと両足を水に引き込まれる。腰を曲げて、流れに逆らって泳いだ。電線をつかんで電信柱にのぼると津波が引き始めた。家や車が流れていく。寒さと恐怖で電信柱の上で震えていた。</p> <p>（3）負傷後、避難所へ</p> <p>津波が引いたあと、自宅へ帰り妻と再会できた。しかし、向かいの家の奥さんを救いに行くとき、津波の第三波がきた。倒れていた電信柱にのぼったが、右手が動かさなくなり、上へ進めなくなった。水かさはどんどん増えていく。「終わりだな」と思ったところで水が引き始めた。手を抜くと、くぎが6本刺さった痕があった。その後、妻たちと避難所へ行ったが、手の状態は悪く、グローブのように腫れ、曲がらなくなった。角材が脇腹にあたり、あばら骨も折れているらしく痛い。「破傷風になってはいけない」と、知人が救急車を呼んでくれた。救急</p> |

車は翌日来たが、病院へ向かう道路は寸断されている。中学校のグラウンドに降ろされ、ヘリコプターで病院へ搬送された。破傷風は免れたが、そのあと避難した市の体育館もひどく寒かった。発電機でストーブに電気を送っているが、広い体育館にストーブが5、6個しかない。毛布が2枚ずつ配られたので、それが入っていたビニール袋の上下を破り下に履いた。さらにもう1つにはストールを入れて枕にして寝た。

(4) さいごに

そのあと、私は東京の老人クラブ本部に呼ばれて話をした。私は「体は流されたけど心まで流されない」というタイトルの体験談を書いて配布し、カメラやパソコンも全て流されたので、使い捨てカメラで被災地の写真を撮って画像を見せた。驚くべきことに、全国の老人クラブの会員から多額の寄付金が寄せられた。手の傷が完治するまでには結局2か月以上かかった。災害を防ぐことはできない。万一被災したときは、その状況における最善の策を考えて実践してほしいと思う。そして、自助（自ら助け合い、常日頃災害に気を配る）、共助（ともに助け合い、常日頃の近所付き合いを大切に）、公助（公の助け合い、公との交流を大切に）を念頭に平時の生活を送っていただきたい。



開催地より

大津波に流されたご経験をわかりやすくお話いただき、また、映像でもその恐ろしさを体験することができ、とても参考になった。今後の防災意識醸成や自主防災組織活動の活性化をはかっていきたい。